論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨 お よ び 担 当 者

報告番号	※　甲　第　　号

氏　　名　山田　祐也

論　文　題　目

日本語と中国語のアスペクト形式に見られる諸制約
―事象投射理論・形式が持つ機能領域の観点から―

論文審査担当者

主　査　名古屋大学教授　　堀江　薫
委　員　名古屋大学教授　　佐久間　淳一
委　員　名古屋大学准教授　大島　義和
委　員　名古屋大学准教授　井土　慎二

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

[本論文の意義]

本博士論文は、**事象投射理論および比較類型論の観点から**、日本語と中国語の「設置動詞（例：置く、貼る）の概念構造上の本質的な相違点を解明することを試みた。具体的には、両言語の設置動詞がどのようなアスペクト形式と共起し、その結果どのようなアスペクト解釈が得られるかを、事象投射理論という理論的モデルを援用して分析した。さらに、両言語で見られる概念構造上の相違点を、言語間の形式と意味の対応関係の緊密度の相違を解明しようとする比較類型論の観点から考察した。

本論文の意義は、事象投射理論の観点から、これまでアスペクト研究で論争の対象となってきた「維持」という用法に着目し、日本語のみならず、中国語の設置動詞も「維持」という概念構造を有することを明らかにした点、さらに、日中語で見られるアスペクト形式に課せられる制約の相違が､両言語の語彙･文法構造に広く見られる、形式と意味の対応関係に関する対比と関連づけられることを類型論的な観点から明らかにした点にある。

[本論文の概要]

本論文は 7 章より構成される。

第 1 章では、本研究に関わる先行研究の背景を概観し、本研究の研究目的及び本研究の構成について述べた。

第 2 章では、第 1 章で簡潔に言及した日本語と中国語のアスペクト形式を対象とした先行研究の議論を確認しながら、具体的な問題点や分析枠組みを示した。

第 3 章では、岩本（2008 など）によって提案されている事象投射理論の分析枠組みでは明らかにされていなかった「～間かかって」のような稼働期間修飾句の概念構造（関数）とその適用プロセスを提案した。具体的には、稼働期間修飾句の概念構造においても､「～間」のような単純期間修飾句と同様に限界化関数（COMP）が含まれていることを提案した。そして、単純期間修飾句と稼働期間修飾句の限界化関数は、修飾期間の計算に利用する終局点の時間情報を下位分類（タイプ A vs. タイプ B）することによって区別した。さらに、期間修飾句の関数適用に伴う「情報の受け継ぎ」というプロセスを提案し､稼働期間修飾句の適用だけでなく､関連する岩本(2008）による事象投射理論の議論に見られた問題点も克服できることを示した。

第 4 章では、従来の金田一（1950)、奥田（1978a, b)、森山（1988)、中村（2001）などの研究によって提案されてきた観点・分析枠組みでは、十分な議論を行うことができない段階複合動詞（｢V-始める｣｢V-続ける｣｢V-終わる｣｢V-終える｣）の諸特徴及び「ている」機能、副詞の関わりについて事象投射理論の枠組みによって議論を行った。第 4 章では、段階複合動詞に関わるアスペクト現象について、第 3 章での本研究の提案を含めた事象投射理論で想定されている、事象構造のタイプの違いや、素性、

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

相変換関数（アスペクト関数）、関数の適用制約を利用することで、分析枠組み内で一定のまとまりのある議論・説明を行えることを示した。

第 5 章では、事象投射理論を援用した通言語的研究（林 2012; 岩本 2015）によってなされてきた「中国語の設置動詞は「維持」を表す概念構造を有していない」という主張に対して、「(ⅰ)「維持」に対する禁止命令表現が成立する」「(ⅱ) 属性叙述化した場合「着」が「維持」を表す」「(ⅲ)「維持の続行」が表される」「(ⅳ)「維持の中止」が表される」という四つの論点から、中国語の設置動詞も「維持」を表す事象概念構造を有することを明らかにした。さらに、形式と意味の対応関係の密接性という比較類型論（Hawkins 1986; 堀江 2001 など）の観点を援用して、中国語のアスペクト形式である「着」に見られる特徴を議論した。そして、日本語と中国語の間においては、形式と意味の対応関係に異なる傾向が存在する可能性があることを指摘した。

第 6 章では、「動的叙述性」という観点から「た（なかった）」の制約を議論している井上（2001, 2011）の研究では十分な説明ができない、「た（なかった）」に見られる認識論に関わる制約について議論した。そして、「形式」と「認識内 / 外の情報」(epistemicity: Shinzato 1991）の関わり（対応関係）の観点から分析することで、「た（なかった）」に見られる認識論的制約とその制約が作り出す特徴を説明できることを示した。

第 7 章では本研究の総括を行い、今後の展望を述べた。

[審査委員会による審議および合否判定]

口述試験では、申請者の方から博士論文の概要についての説明が行われた後、審査委員から質疑応答が行われた。本博士論文が、先行研究を渉猟し、収集した実例の分析、母語話者への容認性の確認を丹念に行った結果、中国語が、先行研究ではないとされてきた「維持」を表す概念構造を有することを明らかにした点、複雑な現象に対して理論的観点及び類型論的観点から首尾一貫した分析を試みた点は高く評価された。一方で、改善点として、事象投射理論という理論的モデルが言語分析の道具立てとして複雑である点、第 6 章が博士論文の主たるテーマとの関連性がやや薄いといった構成上の指摘があった。

本論文は、全体として質量ともに博士後期課程の学位論文としての基準を十分に満たしていると審査委員会の全員一致で判断した。したがって、本論文を合格と判断した。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨